

幼児たちから学ぶ

かずかずのこと ②

— 水色のノートから —

丸山ふみ

つみ草をする幼児から

園庭の若葉がしだいに青葉にかわってくる頃になると、いつの間には幼稚園内を入園式に泣いていた四歳児が主役のような表情で動いているに出合つて「ハッ」としたり、思わず声をかけて幼児からかえつて不審な眼でみられ自分の失敗に気付くことがあります。

新入園児も幼稚園での一日のリズムがわかり、それぞれの幼児が自分の意志で遊びはじめ五歳児も年少児へのもの珍しさがいずれ新しい組での友達関係の中で安定した気持で遊びはじめます。この頃になると教師もまた、安定して幼児のしぐさに眼をむけられます。

この頃には園庭に緑の絨織を敷いたようなクローバーが白い小さい花をつけて幼児達の遊びの相手をしてくれます。

この花が江戸の昔、オランダからガラスの器具などを運んだ時こわれないうようにと、この草の枯れたのを品物のまわりにつめたところから「つめ草」という別名がついたと『ことばの歳時記』（金田一春彦著）に記されていますが、幼児達が毎日毎日摘んでも摘んでも次々と花を咲かせてくれるので「つみ草」と名付けたくなります。

五月晴れのある朝、私も門での幼児を迎えることが終つて、四歳児が数名集まっている傍へしゃがみ、摘みながら仲間に入れてもらえるのを待ちました。

ところが、茎の下部から人さし指と親指で摘める幼児は少なく、むしりとるとかひきちぎるという表現が似合うような手の動き方なのです。その上、摘んだ花を束ねもつ片手の動きもぎこちなく気になります。茎が折れる程強く握っている幼児や、摘んだ花が落ちてしまうような握り方もあるのです。

四歳ではまだこのような動作がうまくいかないのかと考えている私の視線をとらえた幼児に「先生、輪ゴムちようだい」と声をかけられ成程とうなずき立ち上がった私の心の中は複雑でした。職員室から持ってきた輪ゴムを、掌を差出す

三名の幼児たちに一つずつ渡し今度は私が待ちました。

手と物との協調が文化的な世界への適応を獲得していくといわれているが、「輪ゴム」を要求できるこの幼児たちの先刻の指の動きを思うときどんな東ね方ができるのだろうかというところに私の期待が移っていました。

長短不揃いの白い花の束の上方から輪ゴムを通したり、茎の下からとおしたりはできるのですが、輪ゴムを束ねた茎の間に空間があっても気にはならない様子なのです。

一瞬、こんなに互いに友達と輪ゴムを共通に扱うことで仲よしのシンボルにしているのかと思つた程でした。しかし、三メートル程向うで担任が友達と花をつないで頭や胸に飾つて遊んでいるのをみつけ、その方へ馳けていこうとしたので、もう待つてはいられません。

このように輪ゴムを通しただけで、束ねたと幼児が思っているのかと、その行為の是非を判断したのでもなく、私の手の方が早く出てしまいました。

今にも落ちてしまいそうな輪ゴムを幼児の目の前で必要以上に伸ばしてみせて、次に言葉で「ね、これを一回かえして

から通すの」と教えました。三名のうち一名だけしかできず、手伝つたのですがすっかり束ねられて幼児の表情は満足そうでした。「輪ゴムが欲しい」といえても使えないということが私達の課題になります。

雨の日にも

大人の生活が合理化され、共に生きている幼児たちが私たちに提案してくれたことの一つに洋傘の持ち方があります。

自動車に乗せてもらつて成長した幼児にとっては、雨の日に洋傘をさすことは初めての経験かも知りません。頭上にひろげた傘を大人のように片手で持つから、わずかな風にも洋傘をとられて髪や服を濡らしています。

「雨が降る」という自然の営みにさえ無防備な幼児達のために雨の日洋傘の花を園庭に咲かせた組もいます。幼児達は教師の心の中を知らされず、水たまりやかたつむりをみつけて喜んでいきます。

生活していくのに大切な幼児の手が職員の廊下での立話の話題になりました。

(大阪市立松江幼稚園)